
おせんべい

笹丘かもめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おせんべい

【著者名】

篠丘かもめ

【ISBN】

978420A

【あらすじ】

あれは小ちいじく、お盆休みで田舎に帰省していたときのことだった・・・。ショッピングモールの中で迷子になつた私は・・・？

あれは小さいころ、お盆休みで田舎に帰省していたときのことだったはずだ。

わたしは両親と祖母に連れられ、大型ショッピングモールに来ていた。帰省もあと残り一日くらいだったので、両親の同僚のためにお土産を買いに行くことになったのだ。

しかし、私は案の定お土産売り場に着く以前に両親とはぐれてしまい、生活用品売り場をさまよっていた。

子供の頃には陳列棚が何倍にも大きく映り、出口のない迷路のなかにいるようだとでも心細かったのを覚えている。

「お譲ちゃん、迷子かい？」

いきなり頭上から声が降ってきたので急いで見上げると、そこには若い男の人が立っていた。わたしの顔を心配そうに覗き込んでいる。

「・・・うん・・・」

男の人は実に不思議な服を着ていた。この暑いさなかだというのに茶色っぽいような長袖長ズボンに、坊主頭の上にはペシャンと潰れたような変な帽子。

その服の色がカーキ色ということ、その服が軍服ということであることを知ったのは、それから大分後のことだ。

「困ったねえ・・・実は僕もここに来るのは初めてで、よくわかんないんだよ。久しぶりに帰ってきたもんね」

「お父さんもお母さんも、おばあちゃんも見つかんなこの、
「やつが・・・・・・ああ、やういえばお嬢ちゃんのお父さんお
母さんたちは何を買ひにここに来たかわかるかい？」

「じゃあ食品売り場のほうかなあ、まあ行ってみようか」

もちろん私は親に『知らない人にはついて行っちゃいけません』と言われていなかつたわけではないが、この人には一切怪しい雰囲気を感じなかつた。とても優しそうだつた。

「うん！」

というわけで、私はその人に手を引かれて地下のほうに向かつた。

しかしあその男の人もさつき言っていたとおり、ここに来るのは初めてだつたもので、しばらくお土産とは全く関係がないよつた売り場を一緒にさまよつこととなつた。

「お兄さん方向オンチ？」
「前によく言われたよ」

しばらく一人で歩いていると、ふいに向ひの方からお母さんの声が聞こえた。私の名前を呼んでいる。

「あっ、おかあさんだ」

「おー、よかつたね見つかって。」

「お兄さん、ありがとー!」

「どういたしまして。・・・あっ、そうだ、おせんべいあげる」
そういうとその人はポケットの中から紙包みを一つ取り出し、そこから煎餅を一枚取り出して、私にくれた。

こんがり焼けた大きめのしょうゆせんべい。

「もう迷子にはなるなよつ」

「ありがとー!」ざいましたつ!」

そして私はお辞儀をすると、母の声がするほつへと駆け出した。

「あつ、名前聞いてなかつた・・・お兄さん! お名前教えてー!」

「大きくなつたら、おばあさん家のお隣の佐藤さんに『じゅんpeiさんつていう人知らない?』って聞いてみなー!」

「 もう、 ビリに行つてたのよ、 心配したんだからー。」
「 おかあさん、 あのね、 じゅんpeiさんつていうお兄さんがいっしょにお父さんお母さんたちのこと探してくれたの。」
「 あらー、 何かお礼しなきゃねえ。」
「 あのね、 お兄さんおせんべいくれたんだよ、 ほり。」
「 よかつたな、 家に帰つたら食べよう。」
そう言つと父はポリ袋にお煎餅を大事に包んで私に手渡した。

しかし、 結局のところお母は『じゅんpeiさん』にお礼をすることができなかつた。
わざわざまで確かにそいついたはずなのに、 もつになくなつてしまつていたのだ。

家に帰り、 私は大事におせんべいを食べた。 しづかに香ばしく

てなかなかおいしかったのを今でもむかやんと覚えている。

私はじゅんぺいさんの「大きくなつたら」とこつ煎葉をむかやんと守り、今年まで待っていた。

「じんにむかは、佐藤さん！」

「ああ、お隣の由宇ちゃんだね？まあ、大きくなつたねえ」

ほら、私は大きくなつたよ。

「まあお上がりなさい」

「おじやましまーす」

座布団に腰を下ろすと、仏壇が田に入った。お盆だけあって花がわんさか供えられている。

「佐藤さん、今日は一つ聞きたいことがあって来たの」

「あら、困ったわね。私なんかじゃ夏休みの宿題手伝えないわよ」

「ひ、ん、違ひの」

私は緑茶を一口すすつてから聞いてみた。

「佐藤さん、じゅんぺいさんっていう人知らない?」

佐藤さんはびっくりした顔をした。

「淳平かね?」

佐藤さんはよつこりしょと急いで立ち上がり、鴨居の上から額縁を一枚下ろした。ほこりを軽く払い、私に手渡す。

私は目を見開いた。

拡大された白黒写真、そこに写っていたのは間違いなくあのお兄さんだった。

「IJの人ですー。」

「淳平はねえ、私のお兄さんなんですよ。」

それから私は小さいころの体験を佐藤さんに話した。話が進むにつれ、佐藤さんはさびしそうなうれしいような顔になつていった。

「私がお煎餅をもらつたくだりにさしかかった時だ。突然佐藤さんの目から涙がこぼれた。

「私のお兄さん、淳平さんは昔戦争に行って、結局生きて帰つては来なかつたんです。終戦の後、代わりに届いたのが骨箱でした。けれど、故郷に葬つてあげようとお父さんが蓋を開けると、中にお煎餅が一包み入つていただけだったんです。

泣きながら、家族全員で食べました」

「きっとお兄さんはお盆だからこつちに戻つてきていたんでしょうねえ」と佐藤さんは涙をぬぐいながら言つた。

翌日。私はおじいさんの墓参りをすることになり、佐藤さんの家の墓にも行つてきた。

おいしいお煎餅を持って。

花を供え、手を合わせた。

帰り際、ふとふしがえると、さつきまで開いていなかつたお煎餅の袋が開いていて、お煎餅は約一口分くらいなくなつていた。

「食べたらちゃんとゴミは捨ててねーっ……」
墓場に向かつて叫ぶと、
一瞬、『わかつたつござ、お譲りやん』といつ声が聞こえた気がした。

しかし。

「やがて、寺の中で迷つたー。」

私は今でもやつぱつ方向音痴である。

(後書き)

骨箱の中にお煎餅が入っていたという話は、祖母が聞いた実際の話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8420a/>

おせんべい

2010年10月19日09時20分発行